The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第76回大阪大学フランス語フランス文学会 赤木昭三先生追悼シンポジウム「パスカルと後世」 （概要）
Author(s)	永瀬, 春男
Citation	Gallia. 2016, 55, p. 169-171
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61939
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第 76 回大阪大学フランス語フランス文学会

赤木昭三先生追悼シンポジウム「パスカルと後世」（概要）

2015 年 3 月 7 日（土）、於大阪大学文学部本館

司会　永瀬　春男（岡山大学）

1)「ヴォルテールのパスカル批判」　山上　浩嗣（大阪大学）
2)「ボードレールとパスカル」　廣田　大地（神戸大学）
3)「ロートレアモンとパスカル」　寺本　成彦（東北大学）
4)「ヴァレリーとパスカル」　井上　直子（大阪教育大学）

すぐれた作家・思想家は時と場所を超えて対話と論争を誘いつつ、強い関心の対象――共感であれ、反発であれ――であり続ける。パスカルという存在も、一般読者に広く読みつがれ、専門的研究に恵まれるかたわら、当代一流の文学者たちにとって、等閑に付しがたい格別の「問題」であり続けた。それぞれの時代がそれぞれのパスカル像をもち、そこには論じられる対象の意外な相貌とともに、論者の個性と時代の特性が浮かびあがる。（尖鋭な論争家パスカルは、どう応答したであろうか？）

さらにパスカルにあっては、そのテクストをめぐる特殊な事情が介在してくる。『パンセ』と名づけられた作品は、長いあいだ著者の自筆草稿を忠実に反映したものでなかったし、キリスト教の「アポロジー」としての構造があらまし姿を現すのは、20 世紀も半ば以降のことである。パスカル死後に残された長短さまざまの断章は、ポール・ロワイヤル版（1670 年）として編纂されて以来、クーザンの「爆弾報告」（自筆草稿の存在を指摘、1842 年）、ブランシュヴィック小型版（1897 年）と「大作家叢書」版の刊行（20 世紀初め）など、幾たびも大きな変遷を経てきた。その都度、多少とも新たなパスカル像が提示されてきたと言える。

本シンポジウムでは、ヴォルテール、ボードレール、ロートレアモン、ヴァレリーという四人の大家によるきわめて独自な（一癖も二癖もある？）パスカル論・パスカル観と、それがはらむ問題について、それぞれの分野の第一線で活躍中の方々に考察していただいた。

赤木昭三先生のご研究は、近代フランス思想を幅広く覆うものであったが、その出発点はパスカルにおける真空の問題の探究であったし、また最終講義は『パンセ』とリベルタンについてであったことを思えば、本シンポジウムは先生を追悼するのにふさわしい催しとなったのではなかろうか。

発表要旨

1)「ヴォルテールのパスカル批判」山上　浩嗣（大阪大学）

ヴォルテール『哲学書簡』（1734年）第25信のパスカル批判を取り上げ、1）信仰と理性の関係、2）人間の条件、3）気晴らし、4）身体の生命、という4つの論点に注目し、パスカルとヴォルテールの宗教観および道徳観の相違について考察する。二人の見解は共約不可能なまでに対立している。パスカルは、人間の宿命的な不幸の原因を原罪に求め、信仰を通じて死後に神から与えられるかもしれない永遠の生に希望を託すことを勧める。対してヴォルテールは、教義の合理的側面を尊重し、あくまでも現世において神から授けられた幸福に感謝し、労働や他者との交流を通じて、その幸福を社会全体で持続的に発展させていくべきことを説いている。

2)「ボードレールとパスカル」廣田　大地（神戸大学）

19世紀におけるパスカル研究の隆盛の中、ボードレール自身も主にパスカルの『パンセ』について作品の中で何度か、直接的または間接的な言及を行っている。パスカルの想像力批判に対しては、反対する立場を示しているボードレールではあるが、気晴らしに逃れようとする人々とは距離を取り、無限の中に投げ出された人間のあり方と真摯に向き合おうとする点で、パスカルを自らの同胞として強く意識していたように思われる。ただし、そのような類縁性に注目することは却って両者の違いを明確にすることにつながる。すなわち、ジャンセニスムの教義における恩寵を重視したパスカルと、本質的には信仰を持たなかったボードレールという点である。

3)「ロートレアモンとパスカル」寺本　成彦（東北大学）

『マルドロールの歌』（1869）出版・頒布に頓挫したイジドール・デュカス（ロートレアモン）は、「悪」の思考実験とも言える自らの作品だけでなく、19世紀の文学全体を「疑いの詩」と指弾し、否定し去ろうと決意して『ポエジー』（1870）2分冊を執筆する。この自己矛盾とも思われる新たな企図については、実際には『歌』冒頭で「哲学的でより確かな他の道」として既に暗示され、意識されていたと捉えられるのであり、前作であえて採用しないで取っておいた「哲学的方法」を、次作の『ポエジー』で用いる決意がなされたとも考えられる。その際に不可欠な準拠枠となったのがとりわけパスカルであり、デュカスは『パンセ』からの断章を30篇ほど書き換えながら、連続的に読まれる断章（あるいは「箴言」）という形でその企図を具体化していった。『ポエジー』執筆を通じて否定すべき懐疑主義者の筆頭として標定しながらも、その反面、自らの新たな文学的企図の出発点として見定めたのは、いかなる＜パスカル＞であったのか。それを同時代の「哲学場」および中等教育における＜パスカル＞像を参照しながら探っていく。

4)「ヴァレリーとパスカル」井上　直子（大阪教育大学）

ヴァレリーは、レオナルド・ダ・ヴィンチをめぐる考察（特に『追記と余談』(1919)、『レオナルドと哲学者たち』(1929)）および『「パンセ」の一句を主題とする変奏曲』(1923）の中で、パスカルを厳しく批判している。ただし、これらの批判の中で挙げられる『パンセ』の句とは、1)「絵画とは何と虚しいものか、本物は誰も褒めないのに、似ているというだけで賞賛されるとは。」2)「無限の空間の永遠の沈黙は私を脅かす。」3)「繊細な精神」と「幾何学の精神」の三つのみである。さらに、ヴァレリーの批判はパスカルの思索を一切踏まえず、自分の思索に照らしてパスカルの句を引用しているに過ぎない。そこで本発表では、ヴァレリーのパスカル批判を紹介しつつ、それがヴァレリー自身の探求（特に感性、芸術創造に関する思索）とどのように関わっていたのかを明らかにする。